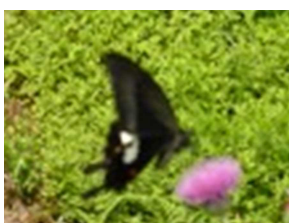


## 組み合わせ

### 1. モンキアゲハの幼虫



モンキアゲハ

黒地で後翅に白い斑紋をもつ暖地系の大型アゲハチョウの仲間で、ナミアゲハやクロアゲハより遅く、倉吉では5月になって羽化してきます。これらが生んだ卵から発生した次世代が、夏の間、打吹山で最も多く見られるアゲハチョウです。

幼虫の食草はミカン類なのですが、打吹山ではカラスザンショウです。大きな葉で長い間伸長を続けますので、たくさんのモンキアゲハの幼虫を養うことができます。季節変化のない熱帯に生息する昆虫には餌が常時

あり、寒さに対する対応もありません。暖かい時期には北方へ分布を広げ、寒くなれば死滅するものもあります。モンキアゲハは夏から秋に老若いろいろな段階の幼虫を見ることができますが、寒冷期には蛹になっていた個体のみが越冬します。

幼虫の天敵は鳥やアシナガバチ、スズメバチです。そこで、これらに捕食されないための手段をとっています。ひとつは色彩による「隠蔽(いんぺい)」です。4齢(孵化後(ふかご)が1齢、脱皮ごとに加齢)までは、白黒混じりの汚い色です。葉の上に落ちた鳥の糞に化けています。5(終)齢になると緑に変わり、葉の色になります。大きくなると糞に見せることは難しくなるからでしょう。常に葉の裏に隠れることなく表面にいますので、自信があると見受けられます。もうひとつは、頭部の臭角が分泌する嫌な匂いによる「威嚇」です。しかし、このような手段を講じていてもほとんどの個体が捕食され、継続観察で最後の5齢まで見続けることはなかなか困難です。



4 齢までの幼虫



緑色の5(終) 齢

### 2. カラスザンショウ



カラスザンショウ



葉にある油点

ミカン科のザンショウの仲間ですが、ザンショウのように良い香りではありません。ザンショウよりも大きくなるので名前にカラスが付けられたのでしょう。打吹山でも10m以上もの高木になっているものもあります。

崩壊地や伐採後地など裸地ができるとすぐ生えてくる、先駆植物(パイオニア)と呼ばれている樹木です。大きな羽状複葉と緑の花を持ち、年に1m以上も成長することもあります。幹や葉にも鋭い下向きの棘が密生し、似た葉をもつ他の樹木からの識別は簡単です。しかし、トゲだけに着目してタラの木と間違えて食べてしまい、かぶれた人もありますので注意してください。成長が早い分寿命は短く、林の中では長く存在できません。絶えず新天地を求めて子孫を移している木です。

葉の香りは、揮発性の精油が油滴となって貯められているからであり、油点と呼ばれています。ミカンの実の皮にある粒々と同じで、葉を陽にかざしてみると、透明な点が見えます。ミカンの仲間はみなこの油点があります。しかし、種によって精油の成分が異なるため、良い匂いあるいは嫌な匂いとなって感じられるのです。モンキアゲハの幼虫の臭角から出す匂いは、幼虫が食べたカラスザンショウの匂いとは少し異なります。